

論文

高齢者の退院支援における看護実践能力育成のための アクティブ・ラーニングを導入した老年看護学実習の評価

奥山 真由美¹⁾, 道繁 祐紀恵¹⁾, 杉野 美和¹⁾, 甲谷 愛子¹⁾

Mayumi Okuyama, Yukie Michishige, Miwa Sugino,

Aiko Kabutoya

キーワード: 在宅復帰, 看護実践能力, アクティブ・ラーニング, 老年看護学, 教育

Key Words: Returning home, Nursing competency, Active learning, Gerontological Nursing, Education

要旨: 回復期リハビリテーション病院における高齢者の退院支援にむけた看護実践能力を育成するために、見学実習に加えて、グループワークとプレゼンテーションを導入したアクティブ・ラーニングの教育実践を行った。その教育効果について、アンケート調査から学生の学びを分析した。その結果、学生の学びとしては、【知識の獲得と新たな発見】【効果的なプレゼンテーション技法と学習の深まり】【回復期リハビリテーションにおける看護実践の方法と看護職の役割の理解】【目標達成に向けたチーム作り】【学習の楽しさと学習の動機づけ】の5つのカテゴリーが抽出された。

アクティブ・ラーニングを臨地実習に導入することは、学生の能動的な学修を促進し、看護の専門的知識・技術に対する学びを深めることができるだけでなく、少人数グループによる課題解決に向けたチーム作りを行う過程で、主体的に問題解決できる能力やケアを創造する力に繋がる基礎的能力を養うことが可能になることが示唆された。

1. はじめに

平成 20 年度の中央教育審議会（中教審）による「学士課程教育の構築に向けて」の答申¹⁾では、学士課程教育により学生が獲得する能力を「学士力」として定義し、体系的な知識の理解のみならず、汎用的技能や態度・志向性、総合的な学習経験と創造的思考力の育成のための教育の質の転換を大学に求めた。平成 24 年には、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて：生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」の答申²⁾が中教審より提示された。この答申では、学生の主体的な学修を促すための質の高い

¹⁾ 山陽学園大学看護学部看護学科

学士課程教育への転換の早急かつ効果的な取り組みが求められており、知識伝達型の授業形態からアクティブ・ラーニングへの転換の必要性が強調されている。学士力を身に着けるためには、学生の能動的な学修が必要不可欠であり、大学教員には、アクティブ・ラーニングの教育実践と評価を行いながら、教育の質を高めていくことが求められている。

看護学教育においては、学士課程で学生が獲得すべき看護実践能力について、平成 23 年に文部科学省より「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標³⁾」が示された。学士課程版実践能力として、看護師の看護実践に必要な 5 つの能力群とそれらの能力群を構成する 20 の看護実践能力、またそれらの卒業時の到達目標と教育の内容、期待される学習成果で構成されている。そして、ここで示されている教育内容や学習成果は例示であり、各大学が主体的に設定していく必要性が述べられている。看護師の看護実践に必要な 5 つの能力群は、ヒューマンケアの基本に関する実践能力、根拠に基づき看護を計画的に実践する能力、特定の健康課題に対応する実践能力、ケア環境とチーム体制整備に関する実践能力、専門職として研鑽し続ける基本能力である。そして、看護実践能力は学士力を基盤とし、さらに看護学の知識と技術を融合し統合させることによって可能になるものである⁴⁾。

A 大学の老年看護学教育は、老年看護学概論 1 単位 30 時間（2 年次後期）、老年看護学援助論 2 単位 60 時間（3 年次前期）、老年看護学実習 4 単位 180 時間（3 年次後期）で構成されており、老年看護の実践に必要な知識、技術、態度を段階的に修得できるようになっている。わが国の少子高齢化の進展や医療技術の進歩、地域包括ケアシステムの推進などに伴い、老年看護活動の場は多様化し、看護職に求められる役割や機能は、保健・医療・福祉の分野でますます拡大している。そのため、今後の社会や医療、看護の変化に対応可能な必要最小限の看護実践能力³⁾を獲得すべく教育内容と教育方法を吟味し、実践・評価していく必要がある。

我々は、学士課程で獲得すべき学士力を基盤とした看護実践能力を育成するために、講義や演習、臨地実習などにおいて、教育内容と教育方法の検討を繰り返してきた。老年看護学援助論では、健康な高齢者を対象としたヘルスアセスメント演習や視聴覚教材を使用した認知症高齢者のアセスメント演習、事例を用いた看護過程演習、実習病院で開催される看護セミナーへの参加、高齢者疑似体験などを行ってきた。次年度より、批判的思考力や創造性、問題解決能力、根拠に基づいた看護実践を行う能力などの育成のために、老年看護技術の Evidence を明確にするための実験演習を導入する予定である。老年看護学実習では、一般病院での老年看護の実践(2 単位)に加えて、回復期リハビリテーション病院での退院支援における看護実践(1 単位)、グループホームや介護老人保健施設での認知症高齢者のケアの実践(1 単位)を行っている。臨地実習で、学生は老年看護学の理論と実践を結びつけ、あらゆる健康レベルにある高齢者を総合的に理解し、高齢者と家族の自立性と QOL 向上のためのケアを行うことのできる能力を獲得することを目的に学修している。

新たな教育方法として、老年看護学実習 4 単位のうち 1 単位を構成している回復期リハビリテーション病院での臨地実習に、平成 26 年度よりアクティブ・ラーニングを導入した。平成 25 年度までは、2 日間の見学実習のみであったが、平成 26 年度より 5 日間の実習に変更し、見学実習に加えて実習施設での看護師とともにグループ討議や発表会を行い、回復期過程にある高齢者を対象とした退院支援における看護実践能力の育成に努め

ている。

2. 研究目的

回復期過程にある高齢者の退院支援における看護実践能力育成のためのアクティブ・ラーニングを導入した老年看護学実習の教育実践の効果を検討する。

3. 用語の定義

1) アクティブ・ラーニング

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称である。学習者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である²⁾。

本研究では、回復期リハビリテーション病院における見学実習に加えて、実習施設において臨地実習指導者や教員の指導、助言を受けながらのグループディスカッションや学生によるプレゼンテーションの実施に至るまでの教育方法をアクティブ・ラーニングとする。

4. 回復期リハビリテーション病院での実習の概要

1) 実習目的

(1) 老年看護学実習 (4単位)

加齢のリスクに伴う健康障害を持つ高齢者を総合的に理解し、健康回復および生活の再構築に向けて、個人の生活史や価値観を踏まえながら、高齢者の自立性とQOL向上のための看護を実践する。そして、超高齢社会における看護職の役割を認識し、老年看護を探求し創造していく能力を養う。

(2) 回復期リハビリテーション病院での実習 (1単位) における実習目的

①高齢者の生活を支える保健・医療・福祉システムにおける看護の役割・機能を理解する。

a. 高齢者の機能回復に貢献する他職種との連携の実際に参加し、チーム医療における看護職の役割を理解するとともに、高齢者を中心とした協働のあり方について考察できる

b. 退院に向けた支援において、高齢者と家族のソーシャルサポートネットワークを強化する。

c. 高齢者に関わる保健・医療・福祉システム（法制度、政策）を評価するとともに、社会の変革のなかの老年看護の課題と方向性を考察する。

2) アクティブ・ラーニング導入による学習効果としてのねらい

平成25年度までは、回復期リハビリテーション病院における実習は、2日間の見学実習のみを中心とした教育方法であった。見学実習は、看護学実習においてよく使用される教育方法であるが、どちらかといえば、臨地実習施設の看護職から学生への一方向の指導の要素が強く、学生は受け身になりやすい。しかし、見学実習に、グループディスカッションやプレゼンテーションを導入することで、臨地実習指導者や教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修への転換を図る²⁾ことができると考えた。また、その学修過程は、老年看護学実習の目的でもある「超高齢社会における

看護職の役割を認識し、老年看護を探求し創造していく能力」の獲得につながるものでもあると考えた。老年看護学は学問としての歴史が浅く、看護実践の方法や理論構築は未だ発展途上である。学生たちは、卒業後、看護職として、様々な看護実践の場において高齢者や家族に対するケアを創造し実践する能力、多職種と協働し看護の専門性を発揮する能力、老年看護学の発展に寄与する研究能力など、生涯学び続ける力²⁾や自己研鑽する力、課題解決する力などを獲得し、能動的に実践や研究を行うことが求められる。これらのことから、アクティブ・ラーニングは、学生の能動的な学修を促進し、看護実践能力の育成に有意義な教育方法になり得ると考えた。

3) 実習方法 (アクティブラーニングの実際)

初日：実習目的や目標を確認し、回復期リハビリテーション病院での実習における自己の目標設定を行う。また、回復期リハビリテーション看護や地域連携、介護保険制度、チーム医療、老年看護技術等について自己学習を行う。

2 日目：臨地実習の初日である。朝のミーティング参加、施設オリエンテーションを実習施設の専門職による講義、見学実習を行う。

講義：回復期リハビリテーション病棟とは

「概論、看護理念、教育理念、看護体制など」 講義担当：病棟看護師長

「回復期リハビリテーション看護の役割」 講義担当：臨地実習指導者

「メディカルソーシャルワーカーの役割とチーム連携」 講義担当：MSW

「回復期病棟リハビリの役割」 講義担当：PT, OT, ST

見学：理学療法、作業療法、言語療法の実際 見学担当：PT, OT, ST

見学：有料老人ホームの見学 担当：有料老人ホーム責任者

講義：関連施設のクリニックの役割 講義担当：クリニック看護師

講義：関連施設の訪問看護ステーションの役割 講義担当：看護管理者

見学：院内見学 (看護実践の見学)

討論：臨地実習指導者、教員との小グループ討議 (講義や見学を通して関心のあること、疑問に思うこと、探求してみたい課題について等)

3 日目：看護の実践を見学し、参加する。

内容は以下のとおりである。

①入院受け入れ：回復期病棟に入院する患者の看護とチームアプローチによる退院を見据えた目標設定と計画立案、チームカンファレンス (入院時の専門職による合同評価) の実際を見学、参加する。

②患者・家族への説明：患者と家族に対する専門職 (医師、看護師、栄養士、PT, OT, ST, ケアマネージャー、退院後入居する施設の職員など) からの病状説明や目標の到達度、課題、今後の方針などの説明を行う場面を見学、参加する。

③チームカンファレンスの見学：患者の担当の看護師やセラピスト、医師などの専門職によるカンファレンスの場面を見学、参加する。

④臨地実習指導者とのグループ討議 (3 グループに分かれる) を行う。1 グループ (5 名程度) ごとに、臨地実習指導者 1 名と教員 1 名が参加する。2 日間の見学実習を通して、疑問に思ったことや明らかにしたい課題などをグループごとに抽出し、どのように学びを深めていくか、問題や課題を明確にするための方法

や役割分担などを話し合う。その際に、臨地実習指導者や教員より助言や指導を受ける。

- ⑤個人ごとのレポート課題：「講義を通して学んだこと，考えたこと」「老人保健施設，特別養護老人ホーム，有料老人ホームなどの見学を通しての学び」「回復期リハビリテーション病棟の見学や患者様とのかかわりを通しての学び（朝のミーティング，家族説明，カンファレンス，リハビリなど）」回復期リハビリテーション病院における看護職の役割について」について記録する（提出は実習終了日）。個人での記録を行うことで，学びや疑問点をより明確化する。

- 4 日め：課題解決のためのグループ討議を行い，看護師への質問や討議，実際の看護実践の見学，セラピストやMSWなど他職種への質問，実践の見学などを行う。大学より教材として持参した参考図書（数十冊）をもとに，理論と実践を結びつけながら，問題解決を行う。その後，発表準備を行う。グループ単位でパソコンを所有し，パワーポイントを作成する。パワーポイントには，テーマ，テーマを選んだ理由，明らかにしたい課題を明確にするための方法，理論的背景，看護の実際，結論，学びと課題などで構成する。資料作成と発表に関する役割分担を行い，協力しながらグループワークを行う。資料作成や発表準備などは，臨地実習指導者や教員の指導を受けながら行うが，あくまで学生が主体で学習を進める。実習中，1時間程度で介護老人保健施設，特別養護老人ホームの見学実習を行う。
- 5 日め：午前中に，病棟見学をし，疑問点があれば，臨地実習指導者に質問を行う。その後，資料作成と発表準備を行う。全体の司会や記録係を決め，リハーサルを各グループで行う。午後から，学習成果発表会を行う。各グループの発表時間は10分であり，質疑応答5分，指導者からの助言を5分とし，計20分とする。3グループの発表を終えた後に，約1時間で，発表会の内容や1週間の実習を通しての疑問点や学びなどをグループごとに臨地実習指導者，教員とともにさらなるグループ討議を1時間程度行い，学びを深める。その後，全体の総括カンファレンスを行い，学生ごとの反省と臨地実習指導者，看護部長または病棟師長，教員からの助言を行い，まとめの場とする。

5. 研究方法

1) 対象

A 大学看護学部3年次生のうち，平成27年12月または平成28年1月に実習を行った学生28名を対象とした。

2) 調査方法

実習の最終日に，総括カンファレンスを行った後に，調査票を配布した。調査表の内容は，「グループワークとプレゼンテーションを通して学んだこと」についてである。分析方法は，内容分析の手法を用いた。

6. 倫理的配慮

対象者に，研究の目的と方法，匿名性の保証，自由参加であること，参加の有無は成績には影響しないこと，参加しない場合でも決して不利益は被らないことを口頭で説明した。調査協力について強制力が働かないようにするために，回収方法は，回収ポストへの投函とし，調査票の提出をもって調査協力への同意とみなした。

7. 結果

調査協力に同意の得られた学生は 27 名 (96.4%) であった。グループワークとプレゼンテーションを通しての学びとしては、【知識の獲得と新たな発見】【効果的なプレゼンテーション技法と学習の深まり】【回復期リハビリテーションにおける看護実践の方法と看護職の役割の理解】【目標達成に向けたチーム作り】【学習の楽しさと学習の動機づけ】の 5 つのカテゴリーが抽出された (表 1)。

1) 【知識の獲得と新たな発見】

このカテゴリーは、[看護の専門的な知識の獲得][グループワークやプレゼンテーションを通しての気づき][理論と実践を結びつける]の 3 つのサブカテゴリから構成されていた。

2) 【効果的なプレゼンテーション技法の獲得と学習の深まり】

このカテゴリーは、[伝え方の難しさと工夫の必要性][学習内容の共有と視野の広がり][学習の深まり]の 3 つのサブカテゴリから構成されていた。

3) 【回復期リハビリテーションにおける看護実践の方法と看護職の役割の理解】

このカテゴリーは、[入院時からの退院にむけた目標設定][個別性に基づいた看護実践の必要性][多職種連携によるチーム医療の実践][ソーシャルサポートを強化する必要性][エビデンスに基づいた看護実践][患者・家族に対する教育的関わりの必要性]の 5 つのサブカテゴリから構成されていた。

4) 【目標達成に向けたチーム作り】

このカテゴリーは、[チームワークの育成][自己の役割の明確化][疑問の明確化のための工夫][臨地実習指導者からの助言を活かす]の 4 つのサブカテゴリから構成されていた。

5) 【学習の楽しさと学習の動機づけ】

このカテゴリーは、[発表の達成感・充実感][学習への興味・関心][探究心][勉強の仕方を学んだ]の 4 つのサブカテゴリから構成されていた。

8. 考察

1) 【知識の獲得と新たな発見】

学生は、グループワークとプレゼンテーションを通して、[看護の専門的な知識の獲得]ができていた。専門的な知識には、自分たちのテーマに関連した専門的な知識だけでなく、他のグループの発表を聞いて新たに知識を得ていた。また、[グループワークやプレゼンテーションを通しての気づき]では、ディスカッションやパワーポイントの作成過程で、他者との意見交換を行うなかで、疑問の解決を共同で行うことの難しさや新たな発見もあり、そのなかで自らのこれまでの知識不足や勉強不足を痛感するという経験をしていた。[理論と実践を結びつける]では、これまで講義などで学んできた理論を実際の臨床現場で行われている看護実践と結びつけて考えることができおり、臨地実習の本来の目的としての理論と実践の統合ができていると思われた。

2) 【効果的なプレゼンテーション技法の獲得と学習の深まり】

学生はこれまで自分たちで考えた疑問をグループで解決し、発表するという学習機会は少ないと認識しており、プレゼンテーション技法の未熟さを痛感していた。グループ学習した成果を他者にわかりやすく説明するだけでなく、理論的背景や専門的な知識や技術などと結びつけたり、看護実践の工夫などは自分たちで撮影した写真を取り入れたりしながら、他者にわかりやすく伝える方法を見出していた。しかし、発表後の学生や実習指導者、

表1 グループワークとプレゼンテーションを通しての学び		
カテゴリ	サブカテゴリ	コード
知識の獲得と新たな発見	看護の専門的な知識の獲得	介護用おむつの種類を知った。
		回復期リハビリテーション病棟の特徴や役割を知った。
		おむつ着用時の失敗例から正しい装着の仕方を学んだ。
		構音障害の種類、患者とのコミュニケーション方法を学んだ。
		失語症について、病態や看護、構音障害との違いを学んだ。
		患者さんにとって、退院後の生活を見据えた病室環境の整備について学んだ。
		退院後の生活を見据えた看護の実践方法の理解が深まった。
		チーム医療の中での看護職の役割について理解できた。
		患者さんにあったという言葉の意味を知った。
		転倒予防器具の種類と使用方法、看護師にとって、患者にとってのメリット、デメリットがわかった。
グループワークやプレゼンテーションを通しての気づき	グループワークやプレゼンテーションを通しての気づき	患者にあった器具を選択することは、患者の情報を知り、共有することである。
		患者にあった環境整備の必要性と意味を知った。
		患者に対する説明の仕方、家族に対する説明の仕方を学んだ。
		家族看護の実践に必要な視点について学んだ。
		看護師による指導を受けながら、実際に自分たちでおむつを着用し、おむつ装着の仕方がわかった。
		今まで自分たちで疑問などを調べることはほとんどなかった。
		先生の力をあまり借りずに自分たちで学習することで、普段の自分の考える力の不足を感じた。
		何とかまとめることはできたが、最後が上手くまとまらなかった。
		発表後に、指導者や教員からの助言より、もっとこうすればよかったのかと発見が沢山あり学びになった。
		日頃の勉強不足を知った。
理論と実践を結びつける	理論と実践を結びつける	多職種連携の必要性を学んだ。
		メンバーの意見を聞き、新しい発見や意見の違いなど自分だけでは見えない部分が見えた。
		患者の倫理や尊厳について考えることができた。
		指導者からVFの理解の不足の指摘があり、その通りだと感じたのもう少し深く考えるべきと反省した。
		異なる意見を1つにまとめていく過程が難しかった。
		自分たちの言葉で、発表内容を理解した上で、説明することが大切だとわかった。
		人の意見を聞くことで考える幅が広くなり、自分がみることができない点について知ることができた。
		リハビリと一言で言っても患者の機能回復の援助だけではないことに気付いた。
		多職種連携を真近に感じることができ、その必要性を学んだ。また、病院のあたたかさを感じた。
		直接的なケアや援助だけでなく、観察することも大切な看護だと思った。
効果的なプレゼンテーション技法の獲得と学習の深まり	伝え方の難しさと工夫の必要性	患者・家族への説明の場面やチーム医療の実践に参加でき、新たな視点から看護を考える事ができた。
		朝のミーティングで多職種による情報共有やリハビリ体験、MSWの仕事を知った。
		チーム医療の実際を詳しく学ぶことができた。
		一般病棟ではあまり見ることがなかった家族説明について方法や看護師の役割を学んだ。
		急性期病院でのこれまでの実習と結びつけて考えることができた。
		患者の関わりや多職種連携などを通して、患者との距離感を大切にすることを学んだ。
		記録は、どの職種にも伝わる書き方をしなくてはならないことがわかった。
		自宅環境や家族関係、患者・家族の希望を踏まえて個々の患者の目指す自立にむけた支援が必要だ。
		1人1人の患者の目指す自立に向けた支援としてのリハビリの役割を学んだ。
		多職種連携や家族面談などを経て、退院に向けてのリハビリの必要性を学んだ。
学習内容の共有と視野の広がり	学習内容の共有と視野の広がり	朝のミーティングやカンファレンスで多くの職種が互いに情報共有して、ケアを行う必要性を学んだ。
		正しいおむつの装着方法を他者に実演して伝えた。
		人前で発表することは難しく、相手にわかりやすく伝える工夫が必要だ。
		言い回しやベース、詳しい説明など発表慣れしていないことに気付いた。
		5W1Hを使用して、その場にいなくてもわかるようなプレゼンテーションが必要である。
		今までプレゼンテーションをする機会が少なく、その方法がわからないことに気付いた。
		限られた枚数のスライドのなかで、どれを重要視して書くかも重要であると学んだ。
		伝えたいことを的確に伝えることや可視化が必要である資料を考えることが大事だと思った。
		伝えたいことを対して自分たちで理解することが大切で、その後内容をまとめる必要がある。
		限られた時間のなかで何を伝えたいか、何を知ってもらいたいのかを分かりやすく伝えることが難しい。
学習の深まり	学習の深まり	時間を気にして内容が薄くなってはいけなし、内容ばかりで時間がオーバーしてはダメだ。
		他のグループの発表を聞いて、転倒予防や構音障害の看護について学んだ。
		他のグループの発表から自分の知らないことを知り、学びになったし、視野が広がった。
		他のグループの発表を聞いて新たな気づきや様々な工夫の理由を知った。
		自分の持つ知識や考え方の視野が広がる。
		意見を出し合うことは学びに繋がると知った。
		テーマを絞ったことにより、深い学びになった。
		プレゼンテーションを通してお互い学びを共有するのはいい刺激になり、必要な学習方法だと思った。
		テーマを自分たちで決めたので、積極的に学習したり行動したりできたことが深い学びにつながった。
		今までの実習では患者の立場に立って体験することがなく、看護師以外の職種の役割は知らなかった。
患者の立場に立って考えることの大切さや他の職種の役割を学ぶことができた。		
プレゼンテーションをしなければ、ここまで深く考えることはなかった。		

奥山・道繁・杉野・甲谷：高齢者の退院支援における看護実践能力育成のための
アクティブ・ラーニングを導入した老年看護学実習の評価

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
回復期リハビリテーション における看護実践の方法 と看護職の役割の理解	入院時からの退院にむけた目標 設定	家族の介護力をアセスメントして、病院での患者のADLの目標を決めなくてはならない。 多職種連携によるプランを立てる事、個人にあわせたプランを立てる必要がある。 患者のADLのゴールは、患者の状態や家族の介護の状況により検討しなくてはならない。
	個別性に基づいた看護実践の 必要性	患者の自立度や障害の度合いなどにあわせておむつを使用する必要がある。 センサーマットは患者の状態によって違い、置く場所などを自分で考えなくてはならない。 その人なりの自立を支援する必要性があると思う。 入院前の生活と退院後の生活をみる必要がある。 患者や家族の希望を踏まえてサービスの調整をすることが大切である。
	多職種連携によるチーム医療の 実践	STと協力して、嚥下障害のある患者の看護を行う必要がある。 多職種連携と家族とのかかわりが重要であるとわかった。 チーム医療の大切さや多職種連携での看護職の役割がよく理解できた。 患者の状態や変化があったとき、他の職種に情報提供をすることが重要である。 関係する職種がそれぞれ専門性を持って説明するのが患者、家族にとってわかりやすい説明になる。 入院時から多職種連携は必要であり、患者の状態、家族、生活など今後を見据えたケアが必要である。
	ソーシャルサポートを強化する 必要性	自宅でのようにしてリハビリを続けるか、社会資源を知り、調整する。 経済面や家族の介護力や意思を考えて必要な社会資源の利用や支援を行うことが求められる。
	エビデンスに基づいた看護実践	患者、家族、退院後の生活を踏まえて、様々な視点から患者をみることの大切さを知った。 行っているリハビリを踏まえたうえで看護師は患者の身体面の観察をする必要がある。 補助具を活用したり、今後のリスクや現状を考えながら予防策や対応を考えることが必要である。
	患者・家族に対する教育的関わり の必要性	疾患や障害の悪化のリスクを考えて家族に説明する際に現在の状態、問題、リスク、目標を伝える。 家族に対する介護やリハビリに対する指導を行う必要がある。 病棟で行う看護だけでなく、自宅に帰って患者や家族ができることを支援する必要がある。 患者の理解度にあった説明や援助を行うことが大切である。
目標達成にむけたチーム 作り	チームワークの育成	グループとして1つのことをまとめる事やその大切さや難しさを感じた。 協調性が大切である。 文句を言う人に限って自分ではリーダーになれない。 グループワークは協力しないと仕上げられないので、協調性が必要である。 意見を共有することの重要性を学んだ。 今回のグループワークは、多職種連携におけるチーム医療に通ずるものであると強く感じた。
	自己の役割の明確化	グループ内の役割をきちんと決めていないといけない。 仕切る人が必要であり、他の人も協力しないといけない。 役割分担を行うと全員で参加することができる。 他者がどこに注目しているかをしっかりと聞くことで良いグループワークができる。
	疑問の明確化のための工夫	STIに嚥下体操について教えてもらい、方法を知った。 実際に患者がリハビリをしているところを見学し、調べたりすることで看護の実際がみえてきた。 積極的に自分から看護師さんに質問をした。
	臨地実習指導者からの助言を 生かす	指導者が丁寧に教えてくれたので、わかりやすかった。 指導者による指摘をいただいたことで、患者の状態と検査結果が合っていないことに気が付いた。 指導者が丁寧に質問に答えてくれ、自分とは異なる考え方や不足している情報、知識を教えてくれた。 おむつの着方について実践と結びつけて説明してもらい、よく理解できた。
	学習の楽しさと学習の 動機づけ	プレゼンテーションがなかったら、回復期の特徴や疑問を考えることはなかったと思う。 発表後に充実感を感じたし、楽しかった。 疑問に思ったことを皆で調べることはとてもよかったです、今後もこの学習方法を続けてほしい。 今まで自分たちで考えて発表して、よい評価をもらい、達成感を感じた。
	学習への興味・関心	今回学んだことは、卒業論文に生かせると思った。 もっと勉強しなくてはならない。 プレゼンテーションを通して、自分で学ぼうと思えるよい機会になった。 多職種連携についてさらに学習していきたい。
学習の楽しさと学習の 動機づけ	探究心	物事を深く考えることができるようになった。 実習で見学したことや講義で学んだことを結びつけることができた。 プレゼンテーションをするには、自分で学ぼうとする姿勢が必要である。 発表では、言葉の使い方で印象が変わるので今後、考えていきたい。 患者に使用する器具などは、患者にとってのデメリットも今後は考えていきたい。 今までは疾患に関するケアを考えることが多かったが、今後は退院後の生活を考えていきたい。 1つのことばかりに目を向けるのではなく、様々な面から物事を理解する必要がある。 自分の考えや意志を理由を含めて他者に伝えていけるようにしていきたい。
	勉強の仕方を学んだ	疑問に思ったことを明らかにする方法を知った。 疑問に思ったことは、素直に聞いた方がよいと思った。 積極的に行動することで学べる人がたくさんあるということを知った。 1つのことに集中せず、多方面から視野を広げて考えていくことが重要であると学んだ。

教員からのフィードバックを通して、プレゼンテーション技術の不足を更に感じ、もっとこうすればよかったと後悔をしている者もいた。しかし、他者の発表を聞いて、他のグループの課題解決方法を自分たちの方法と比較したり、他のグループの発表内容を共有し、自らの学びにもできていた。さらには、見学実習を通して個人で学修するよりも、プレゼンテーションの実施に至るまでの過程における他者との相互作用による学修は、深い学びに繋がっていることがうかがえた。

3) 【回復期リハビリテーションにおける看護実践の方法と看護職の役割の理解】

回復期リハビリテーションにおける看護職の役割や専門性に関する先行研究⁵⁾では、退院支援を行う上で、患者や家族に対するリハビリや回復に向けた動機づけや直接ケア、教育的機能、生活や合併症予防のための退院指導、インフォーマルサポート、フォーマルサービスの強化などが報告されている。また、患者の生活の再構築の支援やセルフケアへの支援を行い、チームアプローチや多職種連携⁶⁾のなかで退院支援を行う役割が報告されている。本研究による学生の学びは、先行研究で明確にされている回復期リハビリテーション看護の役割について、概ね網羅できていた。このことは、見学実習の学びをグループワークや臨地実習指導者との討論や助言を通して、より明確にすることができたのではないかと考える。本研究では、データ分析をしていないが、各学生によるレポート内容からは、看護実践の方法や看護職の役割がより具体的にかつ明確に述べられていた。

4) 【目標達成に向けたチーム作り】

グループメンバーと同一の目標達成にむけてチームを形成していく過程では、グループのなかでの自分自身の役割形成に繋がり、自らの役割を果たすために努力するのみでなく、看護実践におけるチームワークの必要性を感じていた。チームで目標達成にむけて問題解決のための方法を考えたり、その過程で臨地実習指導者からのスーパーバイズを受けながら、学びを深め、よりよいプレゼンテーションを行うためのチーム作りを行っていったといえる。回復期リハビリテーション看護の実践では、多職種連携によるチーム医療の実践は不可欠⁶⁾であり、そのなかでの看護職の役割や責任の所在、チームで協働するうえでのチームワークの必要性の気づきにも繋がったと考える。

5) 【学習の楽しさと学習の動機づけ】

学生は、プレゼンテーションを通して、自分たちの疑問を解決するだけでなく、他者に学習成果を発表し、成し遂げたことへの満足感や達成感だけでなく、教員や臨地実習指導者からの高い評価を得たときにも達成感、充実感を感じていた。学びは、知的構造の再構成の連続である⁷⁾。知的生産の楽しさが、次なる学習の動機づけになっており、それらの基盤は、個々の学生の探究心であることが示唆された。アクティブ・ラーニングにおいては、学生の探究心を引き出すための教育上の工夫を行う必要がある。また、探究心、知的生産の楽しさ、学習の動機づけ、勉強の仕方の理解は、アクティブ・ラーニングの学修過程において、個人のなかで相互に作用しながら修得していく力であることが推測された。

9. おわりに

回復期リハビリテーション病院における高齢者の退院支援にむけた看護実践能力を育成するために、従来の見学実習に加えて、グループワークとプレゼンテーションを導入したアクティブ・ラーニングの教育実践を行った。学生の学びとしては、【知識の獲得と新たな発見】【効果的なプレゼンテーション技法と学習の深まり】【回復期リハビリテーション

における看護実践の方法と看護職の役割の理解】【目標達成に向けたチーム作り】【学習の楽しさと学習の動機づけ】の5つのカテゴリーが抽出された。

臨地実習にアクティブ・ラーニングを導入することは、学生の能動的な学修を促進し、看護の専門的知識・技術に対する学びを深めることができるだけでなく、少人数グループによる課題解決に向けたチーム作りを行う過程で、主体的に問題解決できる能力やケアを創造する力に繋がる基礎的能力を養うことが可能になることが示唆された。

謝辞

A 大学看護学部老年看護学実習施設である B 病院の看護部長様はじめ、病棟師長様、臨地実習指導者様、スタッフの皆様、丁寧なご指導と学生の学習環境に対するご配慮をいただき、個々の学生が深い学びをさせていただきましたことを感謝いたします。

10. 文献

- 1) 中央教育審議会 (2008) : 学士課程教育の構築に向けて (答申), 中央教育審議会, 2008. <http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf> (2013年11月29日)
- 2) 中央教育審議会 (2012) : 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ学士課程教育の構築に向けて— (答申), 2008. <http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf> (2012年8月28日)
- 3) 文部科学省 (2011) : 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告, <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/033-1/attach/1300996.htm> (2011年3月11日)
- 4) 文部科学省 (2010) : 看護系大学におけるモデル・コア・カリキュラム導入に関する調査研究, 最終報告書, <http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2011/06/16/1307329_1.pdf> (2011年3月)
- 5) 佐久川政吉, 大湾明美, 呉地祥友里, 他(2009) : 回復期リハビリテーション病棟看護師の在宅復帰支援についての認識と役割, 沖縄県立看護大学紀要, 10, 35-43.
- 6) 山口多恵, 松尾理佳子, 福江まさ江, 他(2004) : 回復期リハビリテーション病棟における看護チームと多職種間との連携—脳出血後の鬱症状を呈する患者への関わりを通して—, 長崎大学医学部保健学科紀要, 17(2), 59-64.
- 7) 吉田喜久代 : 学生が主体的に学ぶ授業をするために教師は何を準備するか, 看護教育, 43(4), 265, 2001.